

Title	メシア思想の起源と発展
Sub Title	Messianism, its origin and development.
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.12 (1952. 12) ,p.815(1)- 842(28)
JaLC DOI	10.14991/001.19521201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19521201-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19521201-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟學博士 小泉信三著 B6判 二四〇頁 定價 二〇〇圓 郵税 二四圓

# 近代經濟思想史

わかりよい百萬人の近代思想史要というべく、格調の高い文體と中正不偏の批判解説により、大學々徒の教養の書として又大學教材として最も好適。

スミス、マルサスからケインズ、ビグウに至るまで近代經濟思潮の巨匠大家悉く明快適切なる分析究明の俎上に登場する

内容目次

第一章 古典學派	及び教理經濟學派
一、アダム・スミス	一、概説
二、マルサス	二、メンガー、ギイザア、ボニム、バウエルク
三、リカード	三、ジエグオンズ
四、ジョン・スチュエア	四、レオン・ワルラス、パレトオその他
第二章 社會主義經濟學	第五章 現代諸論
一、マルクス以前	一、限界效用學說の盛行
二、マルクス及びマルク	二、社會的法的的學派
ス以後	三、制度學派
第三章 歴史學派	四、古典學派の擁護者
一、ドイツのロマン主義	ケムプリッジ學派
者及び國民主義者	五、社會主義共同體に於ける經濟計算の問題
第四章 限界效用學派	六、價值自由論

御注文は近所の書店へ願います  
品切の場合も取寄せてくれます

### 目録贈呈

東京芝罘區内三田豐岡町八  
振替東京一五五四九七番

九大 中 脩三著 定價 二七〇圓 郵税 三三圓  
できる子供 Ⅱ 腦髓の發達と教育Ⅱ  
増訂五版 できない子供

子供の腦髓は満三歳までに大人の八〇%まで成長する。できる子とできない子のわかれ目は幼時の腦髓の發達に必要な榮養と保護と刺激とで定まる。定價 一五〇圓 郵税 一六圓

九大 中 脩三著 定價 四〇〇圓 郵税 四〇圓  
受驗期の心理と適應  
新刊 自信のつく學び方學ばせ方

記憶がわるいのは頭がわるいことではない。自分の性格の特徴をつかんでそれに適した正しい勉強法をとれば理解もよくなり容易に自信もつく。

芳村 著 英語の教室  
再版 定價 四〇〇圓 郵税 四〇圓

慶應義塾大學入學案内  
二八年版 定價 三八〇圓 郵税 四〇圓

慶應義塾大學入學英語模擬試験問題集  
附 慶應義塾最近四ヶ年入學試験問題集  
入試の心得、受驗の注意、最近の入試傾向と義塾の近狀が一目でわかる慶應受驗生必携の寶典。

慶應通信

## メシア思想の起源と發展

平井新

苦難に遭えば、「力あるもの」を求めて、救済と幸福の來らんことを願う。この願望は、古來、殆どいづれの民族にも共通に見うけられるところであるが、わけてもイスラエル民族においては最も強く現われた。苦難する民族に救済と幸福を媒介するところの、この「力あるもの」がメシアと呼ばれる。

メシア(Messiah, Messias, Messie)という語はヘブライ語から來たものであつて、その本來の意義は「膏塗られたもの」「膏を塗られたもの」ということであつた。ここに膏というのは、主として橄欖の木の新膏のことであつて、イスラエルやエジプトでは、貴いもの、大切なものには、この膏を塗るといふ風習があつたのである。膏を塗られるものは、その當初は、獨り人間だけに限られなかつたが、しかし後世では帝王と祭司だけが膏を塗られたものと記録されて居り、その後には帝王のみが記され、最後には未來の君主、特に待望された未來の理想王のみが「膏を塗られた者」即ち「メシア」と呼ばれるに至つたのである。

かくして「メシア」という語は理想の聖天子、即ち消極的には苦難からの「救い主」、積極的には、幸福をもたら

メシア思想の起原と發展

す「幸福の主」と解せられるに至つたのである。

(1) ヘブライ語では *Masiah* というがアラム語 (ヘブライ語が死語となつた時にユダヤ人によつてヘブライ語に代つて用いられた語) においては *Moshih* となりギリシヤ語に取り入れられて *Messias* 又は *Messiah* 即ちメシアとなつたのである。但し「救世主」という本来のギリシヤ語は *Xristos* とする。

(2) 舊約聖書サムエル書(後書)一、二一)などには楯にも膏を灌がれた場合のことを傳えている。

## 二

メシアの觀念は、いつ生れ、いかに發達し、どう變遷して行つたか。まず舊約資料について見よう。

舊約聖書は極めて數多くの史料から次第にでき上つて一巻となつたものであるが、その中、最も古い部分は一 generally 「ヤーウィスト」*Jahvist* (ヤウエー) といわれている史料である。ところが、この「ヤーウィスト」を再検討するとこの史料そのものの中にも更に一段と古い特殊の少數斷片が一史料を成して存在していることが認められる。創世紀第三章二二、二四、第六章一—三、第十一章一九、第三章二四、二五、二七、二八がこれである<sup>(1)</sup>。そして、この部分は「最古のヤーウィスト」と呼ばれて、一般的に所謂「ヤーウィスト」史料から區別される<sup>(2)</sup>。

この「最古のヤーウィスト」史料について、メシア思想を考察すると、この史料の中にはメシア思想はまだ全く見いだされない。その理由はこうである。

そもそもメシアというものは、神と人間との間に介在して、神の垂れ給う惠福をば人間に取次ぐことを本来の使命とするところの仲保者である。だからメシアの存在には何よりも先ず、神の位置する次元と人間の位する次元との間に絶対に越えることのできない上下の隔りが存在すること、換言すれば、神が仲保者を必要とするほどに、人間界に

超越し、人間がその前に跪坐し、畏怖する至高の存在者であることが必要である。

しかるに「最古のヤーウィスト」の中に物語られている神は、あたかも人間の如く、人間も亦神の如くして、神と人間との間に遠く隔りが無い。到底、人間界を超越した存在としての神などは考えられない。そこに考えられている神は人間の中に混り、人間と角力をとつてくれる神であり、人間が塔を築いたと聞けば、わざわざ天から降りて来て、人間の中に入つてきて、人間の言葉を亂して歸るところの神である<sup>(4)</sup>。

人間も亦神に近い。人間の娘共は神孫のところへ嫁に行つて<sup>(5)</sup>。そして人間は、神からも「われわれの如くなり、善悪を知る」に至つたといわれているのである。かくして神は人間に近く、人間は神に近い。神人相隔ることは僅に一步である。人間はすでに萬事を辨えて神の如くである。

この上は人間が不老不死の樹の實でも食べて永遠の命などを得たら、神そのものになつてしまふと案ぜられている。神、人間は正に互角の位置にある<sup>(7)</sup>。そこで神は人間を征服しようとする。人間が生命の樹を奪取せぬよう心がまえて<sup>(8)</sup>いる。人間が互に打合せて町や塔などを建てぬように神が先きへ廻つて人間の言葉を亂さんとしている。人間も亦神を征服しようとする。神を負かそうとして、ヤコブは夜中に、ヤボクの河の主かと思われる神と角力を取り、又神を征服しようとして、人間は神の御座所にとどく塔を築いて<sup>(11)</sup>いる。それは正しく神、人の鬭争である。その結果は無論殆ど神の一方的な勝利に歸している。人間は遂に不老不死の木の実を嗜むことができず、百二十歳と壽命を限らるるに至り<sup>(18)</sup>、又言葉をも亂され、住居を散らされた<sup>(14)</sup>と物語られている。

右によつて、うかがわれるように、神に對する人間の態度は神の使者たるメシアに繼り、彼を通じて、神の恩寵に浴しようというような謙虚で謹み深い態度ではなくして、自ら直接に神に對決し、神を搦じ伏せ、押し倒して、單刀

直入に神の手から恩恵をもぎとろうという強引不遜な態度である。それは神によつて恩寵の授けられんことを希い、メシアによつて幸福のもたらされんことを俟つ敬虔な宗教心とは凡そ正反對である。このような神、人五角の對決的關係に超人間的な神の使者たるところのメシアが存在する餘地のないことは自ら明らかであろう。尙、メシアなるものは本來幸福をもたらすものであるから、幸福を下さんとする慈愛深き神を前提とする。然るにこの物語における神は慈愛の神どころか人間の敵として現われている、「最古のヤウウエスト」にはメシア思想はその片影すら見出すことができない。

- (1) この點に關する研究は石橋智信「メシア思想を中心としたイスラエル宗教文化史」大正十四年三頁以下。
- (2) 石橋智信「メシア思想」世界精神史講座第七卷所載、昭十六年。
- (3) 創世記 第三十二章二五、二六、二八、二九。
- (4) 創世記 第十一章一、二、三、四、五、六、七、八、九。
- (5) 創世記 第六章一、二「人地の面にふえはじまりて女子之に生るに及べる時、神の子等人の女子の美しきを見て、その好むところの者を取て妻となせり。」
- (6) 創世記 第三章二二
- (7) 創世記 第三章二二
- (8) 創世記 第三章二二
- (9) 創世記 第十一章七
- (10) 創世記 第卅二章二五
- (11) 創世記 第十一章一乃至九
- (12) 創世記 第三章二二

- (13) 創世記 第六章三
- (14) 創世記 第十一章八、九

三

次に一般ヤウウエスト史料について見よう。

一般ヤウウエストはイスラエル民族の過去の受福の物語である、それはイスラエルがヤウウエスト神の選ばれた民として、いかに幸福に生れ、いかに幸福に育つてきたか又ヤウウエストがイスラエルの神としていかに彼等に幸福を與えたかの歴史物語である。

ここに見るヤウウエスト神は「最古のヤウウエスト」に見るような人間の敵として人間に對決する神ではなく、苦難の時も然らざる時も常にイスラエル民と共に在つて、彼等を救い守護し恵んだ慈愛深き神として現われている。ヤウウエストの恩寵の故に、ノアの一族は洪水の苦難を逃れ、<sup>(1)</sup>種蒔時と刈入時、夏と冬とは時をたがえずして至り、<sup>(2)</sup>收穫は百倍し、<sup>(3)</sup>その地は特に恵まれた地としてエデンの園の如く<sup>(4)</sup>乳と蜜との流るる地となり、民は濱の眞砂の如く殖へ増した。<sup>(5)</sup>個人も、その子孫も、その一家も、その一族も、その國家も、みな神に救われ、恵まれ導びかれた。それは恰も黄金時代であつた。

わけても神の加護の厚かつたのは民祖アブラハム、イサク、ヤコブであつた。アブラハムには神常に共に在し、又常に神に事えてモーセと同じく、神の僕といわれている。<sup>(6)</sup>イサク、ヤコブ、又同様であつた。彼等は神の恵福を豊にうけた受福者であるが又同時にその恵福を子々孫々に傳達すべき授福者「メシア」だと考えられた。

アブラハムがその本来の地を離れて後の住地に至らんとする時に神が現われて、「汝の國を出で汝の親族に別れ、汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ、我汝を大なる國民となし汝を祝み汝の名を大ならしめん、汝は祉福の基となるべし、我は汝を祝する者を祝し汝を誼う者を誼はん、天下の諸の宗族汝によりて福祉を獲ん」とアブラハムに誓われている。ここに「天下の諸の宗族汝によりて福祉を獲ん」というアブラハムは正に「もろもろのやから」への神の恵福を取次いで、幸福をもたらすところの者即ちメシアの姿に外ならない。イサク<sup>(8)</sup>、ヤコブについても亦同様である。

彼等は何人よりも神に愛護され、その最大の恩恵をうけた、いわば幸福の化身ともいふべき偉大なる人物であつた。彼等は今は亡き遙遠な過去の人物ではあつたが、それだけにイスラエル民の思慕は強く、イスラエル民はこれらの多幸なりし民祖において、既に自分達後この人間の幸福までが約束され、豫定され、そして實現されるもつと深く信じていた。われわれの未來の幸福はこれら民祖によつてのみ與えられるのだ。われわれは唯民祖の幸福にあやかるのである。このようにヤウイストは説くのである。

民祖アブラハム、イサク、ヤコブ等はイスラエルにヤウエ神の垂れ給うた幸福を取り次ぎ、もたらすところのメシアであるが、それは未來の幸福を未來に待望される救世主がもたらしてくれろという所謂「未來のメシア」ではなくして既に亡き過去の人物、「過去のメシア」である。

- (1) 創世記 第八章二一
- (2) 創世記 第八章二二
- (3) 創世記 第二十六章二二

- (4) 創世記 第十三章一〇
- (5) 創世記 第二十八章一四
- (6) 創世記 第二十六章二四
- (7) 創世記 第十二章一、二、三
- (8) 創世記 第二十六章二三
- (9) 創世記 第三十一章一、三

四

初めて「未來のメシア」思想を説いたものは、通説では北朝イスラエル王國のヤラベアム二世(紀元前七八八)の時代に現われた預言者アモスであるといわれている。たしかにアモス書にはこの主張を裏付ける一連の章句が見出される。同書第九章八一―一五節がこれに該當すること「未來のメシア」思想を説いたものとして屢々引照され、廣く人口に膾炙しているのは第九章十三節の左の一句である。

「エホバ言ひ、視よ、日いたらんとす。その時には耕す者は刈者に相繼ぎ、葡萄を踐む者は播種者に相繼がん。また山々には酒滴り、岡は皆鏗けて流れん」(アモス書第九章一三)

ここにメシアの出現によつて牧歌的な樂園の到來すべきことが預言されている。紛う方なき「未來のメシア」思想である。しかるに、この一節は前記第九章の他の諸節と共に實はアモス自身の筆に成るものではなくして後代の加筆であることが明かにされた<sup>(1)</sup>。事實、アモス書を注意深く讀む者は、この書の主調が右のような樂觀的預言とは決して相容れるものでなくて、未來の破滅の必至を斷言するという極めて悲觀的態度に支配されていることを認めないわけ

には行くまい。

預言者アモスが活動した時代はヤラベアム二世の治績内外に大いに擧つて、正に國運隆昌の時代であつた。ことに相次ぐ隣邦諸國との戦に勝ち誇つたヤラベアム二世は、あたかもソロモン大王の如く、宮を造り殿を營んで一代の榮華を極めた。國民も亦狂喜して平和と戦勝の至福に酔うた。しかし、かかる繁榮の世は却て幾多の社會的弊害と道德の腐敗と宗教の墮落とを生んだ。富者、強者は傳來の淳朴なる生活様式をすてて「豪華なる鑿石の家を建て」て住い、「美しき葡萄園を作つて」<sup>(2)</sup>「樂しみ」、「貧しき者を踐みつけ」、「貧しきものを虐げ」、「正義をおこのうことを知らず」、「正義を地に擲つて」<sup>(6)</sup>神を畏れず、「神を求めず、神に歸らう」とはしない。貧者、弱者もこの風に做つて宗教的關心を失うに至つた。かくて天下は滔々として唯、眼前の物質的幸福のみ追うてヤウウェによつて誓われた幸福實現の日、即ち「ヤウウェの日」の到來をおそしと待ちあぐんだ。この時決然起つて、富者、強者の横暴安逸奢侈を責め、神を求めず宗教に無關心なる國民の態度を詰つたのがアモスであつた。彼は現實の不義不信を直視して、徒に未來の幸福をのみ夢想するところの國民を嚴正に批判して、未來の幸福を否定し、亡國の必至を説いた。神罰は驕慢なる國民の頭上に必至である。不正の世に對し神「災禍を降さん、福祉を降さじ」<sup>(4)</sup>と叫んで、アモスは國民に強く警告したが、これに耳を藉そうともしなかつた國民に向つて、アモスは最早やかくなる上は亡國の悲惨なる運命の到底避け難いことを説いていう。

「汝の妻は町の中にて妓女となり、汝の男子、女子は劍に斃れ、汝の地は繩もて分たれ、而して汝は穢れたる地に死、イスラエルはとらへられゆきてその國を離れん」<sup>(7)</sup>と。

かくて國民が鶴首してその來ることを待つところの「ヤウウェの日」、「メシアの日」は「幸福の日」ではなくして

「災禍の日」<sup>(9)</sup>であり、光明の日ではなくして闇黒の日<sup>(10)</sup>であり、樂しみの日ではなくして、哀しみの日であり、「獨子を喪つた哀傷の日」<sup>(11)</sup>であると説かれたのである。「エホバの日を望む者は禍なるかな、汝ら何とてエホバの日を望むや、是は昏くして光りなし」<sup>(12)</sup>「人獅子の前を逃れて熊に遇い、又家にいりてその手を壁に附て蛇に咬るにも似たり。エホバの日は昏くして光りなく、暗にして耀なきに非ずや」<sup>(13)</sup>

アモスによつて宣べられたところは正しくメシアの幻滅に外ならぬ。即ち不義と不信との現狀は今直にこれを反省、悔悟するところなければ、必ずや神による未來の咎禍と刑罰の到來を以て報いられざるをえない。神による咎禍と刑罰とは何かといえればそれは死滅と亡國に外ならないのである。終末は幸福の日ではなくして神罰の咎禍の日である。かくてアモスによつて宣べられたところはメシアの到來ではなくして幻滅であつたのである。

(1) Wellhausen, J.: Die Kleinen Propheten Berl., 1892

石橋智信——「メシア思想を中心としたるイスラエル宗教文化史」大正一四年一六八頁以下

カープ——「舊約文學概論」昭和廿三年版四八九頁

- (2) アモス書 第五章一三
- (3) アモス書 第五章一一
- (4) アモス書 第五章一二
- (5) アモス書 第三章一〇
- (6) アモス書 第五章七
- (7) アモス書 第五章四、六
- (8) アモス書 第四章六、八、九、一〇、一一

メシア思想の起原と發展

- (9) アモス書 第六章三
- (10) アモス書 第二章一八、二〇
- (11) アモス書 第八章三、九—一四
- (12) 石橋智信、前掲書 一四七、一六三、一六七

五

アモスと共に「未來のメシア」思想の先唱者と信じられている者に彼に後れること約二十年即ち紀元前七四〇年に南朝ユダ王国に現われた預言者イザヤがある。

イザヤ書の中で明かに「未來のメシア」思想を表明しているが目せらるるのは第四章第二節、第七章十一—廿一節、第九章第一節—七節及び第十一章第一—八節であるが、就中最後の第十一章第一—八節がその代表的なものとして廣く知られている。それは次の一句である。

「エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて實をむすばん。その上にエホバの靈とどまらん。…正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて國のうちの卑しき者のために制定をなし、その口を杖をもて國をうちその口唇の氣息をもて悪人をころすべし。正義はその腰の帶となり、忠信はその身のおびとならん。おほかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、犢牡獅肥えたる家畜ともに居りて小き童子にみちびかれ、牝牛と熊とはくひものを同じにし、熊の子と牛の子とともにふし、獅はうしのごとく藁をくひ、乳兒は毒蛇のほらにたはふれ、乳はなれの兒は手をまむしの穴にいれん」

右の一節はグビデの子孫にして正義の救済者たる理想的君主の出現を約束した前記第九章第一—七節と共に「未來のメシア」思想を明確に説いたものとして最もよく引照されるところであるが、これ又アモスの場合と同様に、いずれも實はイザヤ自身の筆に成るものではなくして、後世の加筆であるといわれている。事實、イザヤ書全般の論調がイスラエル民の不義と不信とに對する神罰到來の必至を説くほどに脅威的且つ悲觀的なものであつて、メシアの出現を未來に約束するというが如き樂觀論とは到底相容れないものであることは、一讀容易に看取せらるるところである。

預言者イザヤは南朝ユダ王国においてウジア王死去の七四四年に君命をうけてよりヨタム、アハズ、ヒゼキア三王の治世に互つて約四十三年間、ヤーウエの正義と聖との名において預言活動を續けた。アモスは神の正義を強調し、イスラエル民の不義と不信を詰つて、その亡滅の必至を説き、又ホセアは正義の外に愛を認めて神の愛を力説したが、イザヤはホセアが愛を以て深めた正義を更に聖を以て補い、神の聖を特に強調して不義不信なるイスラエル民の亡滅を預言した。

アモス及びホセアは北朝イスラエル王国において預言したが、これに反し、イザヤは南朝ユダ王国において預言した。當時のユダ王国はアモスが活動したヤラベアム治世下のイスラエル王国と同じく強大且つ繁榮して「かれらの國には黄金白銀みちて財寶の數かぎりなし。かれらの國には馬みちて戦車のかず限りなし」(イザヤ書第二章七)とイザヤが述べている程であつた。しかし、かかる國家の隆昌は必ずしも國民全般の幸福を増進するものではなかつた。それどころか貧富の懸隔を増大し、道義を低下せしめ、神事を閑却せしめた。富者は「家に家をたてつらね、田圃に田圃をましかえて餘地をあまさず、己ひとり國のうちに住まんとす」(イザヤ書第五章八)というように、只管、富の蓄積と獨占に汲々と

して、多數の貧しき者を顧みず、爲政者は「乏しきものの訴へを受けず、わが民の中の貧しき者の權利を剝ぎ、寡婦の資産をうばい、孤兒のものを掠む」(イザヤ書 第十章二) というように正義を無視して弱者を虐げた。かれらは自らを高くして「萬軍のエホバの律法をすてて、イスラエルの聖者のことばを蔑して」、神を畏れず、神の正義を起てず、神に歸らず、エホバを求めようとはせず、徒らに目前の幸福に安んずると共に更に未來の幸福の幻を夢想して、しかも「神の日」を光明の日と楽しみ待つている。眞に神の聖を辨えざるの甚しきものである。そこでイザヤは不義不信なる彼等に向てヤウエの正義と聖とを力説し、若し彼等が直に反省悔悟して、これに従わざる時は神の怒は靦面であつて、他國もこれを助けず、過去のメシアの幸福の誓が實現されるという「その日」は、光明の日ではなくて、暗黒の日、「懲罰の日、打棄てられる日、艱難の日」憂いの日となり民は捕えられ、國は亡びざるをえぬ。但し虐げられし弱き者、神を畏れ、神の義を行ふ者のみは熔き別けられて「その日」にも尙生き残るであろうと説いたのである。彼はアモスと同様に幸福の預言者ではなく禍の預言者であつた。アモスにおけると同様の彼の中にも「未來のメシア」思想は見出されないのである。

(1) この點の考證については石橋智信前掲書に詳しい。尙、カーブ舊約文學概論三六四參照せよ。

(2) イザヤ書 第五章廿四節

(3) イザヤ書、第五章二〇。『禍なるかなかれらは惡をよびて善とし、善をよびて、惡とし、暗をもて光とし、光をもて暗とし、苦をもて甘とし、甘をもて苦とする者なり』

(4) 列王紀略下 第十九章三

(5) イザヤ書 第十七章一

(6) イザヤ書 第五章一三

六

ヘブライ思想史上初めて、「未來のメシア」思想を説いたのは、捕囚時代の預言者、祭司であるエゼキエル(Ezekiel)であつた。彼は祖國ユダ王國が新興バビロニアに敗戦したために、國王エコニア以下多數の同胞と共に捕囚として敵地バビロニアに連れ去られた。彼がその地において預言者として召されたのは「エコニヤ王の虜へゆかれしより第五年目」(五九三年)のことであつて、爾來彼の預言的活動はその後約二十七年間續いた。

五九七年、ユダ王國はバビロニアのネブカトネザル大王に敗れて國王始め上層階級の人々一萬餘人が敵國に運ばれて捕囚の身となつたが、ユダの都エルサレムは尙健在であつた。イスラエル民はここに最後の望みをかけていた。戦敗れても神都、神殿の存する限りは、神はこの地を去り給わぬのである。神は必ずその民に幸福をもたらし、彼等を直に歸國せしめると確く信じ、樂觀していた。ここにおいて捕囚の預言者エゼキエルは民の動搖常ない不義、不誠實を語り、その應報として首都エルサレムの陥落必至を説いてやまなかつた。しかし、民は過去のメシアの幸福を盲信してエゼキエルの言に耳を藉さず、それどころか神罰と亡都を預言した彼を冷笑して「日は延び默示はみな空しくなれり」(2)とさへ罵つた。しかし、彼の預言は適中して、五八六年、エルサレムは遂に陥落して、かつてはダビデの勇を誇つた大神都もソロモンの榮華を盡した神殿も諸共に災火にかかつて烏有に歸し、ユダの民も再び第二回の捕囚に遭つた。ユダ王國はここに全く亡滅したのである。

亡都亡國の事實を現前に體驗して、民の態度は變らざるをえなかつた。只管過去のメシアの惠福を盲信して亡國など有りえずと信じきつていた民は今や祖國滅亡の悲運に直面して全く爲すところを知らず、「我等の骨は枯れ我等の

望みは渴く、我等は絶え果つるなり」と落膽絶望したが、やがて我に歸つて「いざ我等如何なる言のエホバより出るかを聴かん」と「民の集會のごとくに」エゼキエルの許に集つてきた。

これに答うる預言者の態度も變つた。警告から慰安と激勵へ、禍の預言から幸福の預言へと變つた。エゼキエルは起つて悲愁の民を慰め、絶望の彼等に希望を與えた。これまで民の不義不信を語つて亡國亡都の必至を以て彼等を嚴戒したエゼキエルは今や正義を高調し、正義は國を興し幸福をもたらす所以を説き、亡國捕囚の民を歸還と興國の希望を以て鼓舞激勵しなければならなかつた。かくて彼は未來におけるメシア出現の必至を説くに至つたのである。

「主エホバかく言たまふ我高き香柏の梢の一を取てこれを樹え、その芽の嶺より若芽を摘みとりて之を高き勝れたる山に樹べし。イスラエルの高山に我これを植ん、是は枝を生じ、果を結びて榮華なる香柏となり、諸の類の鳥皆その下に棲ひ、その枝の蔭に住はん。是に於て、野の樹みな我エホバが高き樹を卑くし、卑き樹を高くし、綠なる樹を枯らしめ、枯木を綠ならしめしことを知ん、我エホバこれを言ひ、之を爲すなり」<sup>(6)</sup>

又曰く

「我かれらの上に一人の牧者をたてん、其人かれらを牧りべし、是わが僕ダビデなり、彼はかれらを牧ひ彼らの牧者となるべし。我エホバかれらの神とならん、吾僕ダビデかれらの中に君たるべし。我かれらと平和の契約を結び、國の中より悪き獸を滅し絶つべし、彼らすなはち安らかに野に住み森に眠らん。我彼ら及び吾山の周圍の處々に福祉を下し、時に隨ひて雨を降しめん、是すなはち福祉の雨なるべし」<sup>(8)</sup>

更に云う

「わが僕ダビデかれらの王とならん。彼ら全體の者の牧者は一人なるべし……我僕ダビデ長久にかれらの君たるべし」<sup>(8)</sup>

〔8〕

これは過去のダビデを過去のメシアとして物語つたものではなく、未來のメシアを第二のダビデと期待したものである。<sup>(9)</sup>ここにイスラエルの歴史上最初の「未來のメシア」思想が表明されたのである。

- (1) エゼキエル書 第一章二
- (2) エゼキエル書 第十二章二二
- (3) エゼキエル書 第卅七章一
- (4) エゼキエル書 第卅三章三〇
- (5) エゼキエル書 第卅三章三一
- (6) エゼキエル書 第十七章二二—二四
- (7) エゼキエル書 卅四章二三—二六
- (8) エゼキエル書 卅七章二四—二五
- (9) 石橋智信 前掲書六二—

七

エゼキエルの後をうけてバビロニアの北に、捕囚の民の中から更に一人の偉大なる預言者が現われた。學問上第二イザヤと呼ばれて、その預言は今日イザヤ書第四十章乃至五十五章に録し傳えられている。彼は紀元前五四六年以後、新に興つたペルシヤの王クロスがやがてバビロニアに侵寇し、その都バビロンを陥れて、捕囚のイスラエル民を解放してくれると預言した。クロスを以て「ヤーウエの受膏者」<sup>(1)</sup>「義をもて起されし者」<sup>(2)</sup>とさへ呼んだ。やがてクロ

スは現われ紀元前五三八年ペルシャ王クロスによるバビロンの無血の城と捕囚民に對するエルサレム再建の許可が事實となつて現われた。しかし、イスラエル民が夢想した歸國もクロスの子ウエ神への改宗も實現されず、更にヤウエが世界の神となり「神の選民」イスラエルが世界の救済の中心となるという第二イザヤの預言も實現されなかつた。イスラエル民は第二イザヤを語つた。これに對して第二イザヤは自國イスラエルを「主のしるべ」に擬しながら數首の歌をもつてこれに答へた。イスラエルは戦に敗け、捕われて敵地バビロニアに在つて苦難を嘗めていた現状を顧るときは政治的には無論失敗ではあるが、宗教的に深い意味をもつ。それは何故であるか。「主のしるべ」たるイスラエルが今尙苦難しているのは決して自らの罪の故でなく、自らは罪がないのに全世界の人々のためにその身代りとなつてその罪をうけて贖罪し、受難しつゝあるのである。全世界の人々はその贖罪の「主のしるべ」イスラエルの仲保によつてその罪から救われ、淨められてやがてメシア時代の平安と幸福を享けることができよう。「主のしるべ」たるイスラエルは正に受難のメシアであり、贖罪のメシアであり、幸福をもたらすメシアである。イスラエルこそは異邦人の罪を贖い、彼等を救うメシア「世界の光」となるのである。しかもそのよき未來の來ることは遠くはない。「われわが義をちかづかしむ可ければその來ること遠からず、わが救おそからず、我すくひをシオンにあたへ、わが榮光をイスラエルにあたへん」ここにエゼキエル以來の「未來のメシア」思想が一層の進展を示している。

第二イザヤにはクロスに關する外はメシアの名稱は現われてこないが、これまでダビデの末裔から生るる榮光のメシアとして待望され大理想的王者は却つて「受難のしもべ」なるべきことがここに暗示されている。そしてこれより後約五百年にしてナザレにイエスが現われ、イザヤ書第五十三章における「しもべ」の姿はそのままイエスの十字架の生涯と見ることができ歌としてここに書き記された贖罪の預言はイエスにおいて成就されたものと見ることができ

よう。

- (1) イザヤ書 第四十五章一
- (2) イザヤ書 第四十五章一三
- (3) イザヤ書 第四十六章一四
- (4) 淺野順一 舊約聖書 昭廿三年、二三七

## 八

メシア思想はエゼキエル、第二イザヤ以後次第に盛んとなり且つ體系付けられて遂に古ヘブライ思想にとつて固有の傳統にまで發達して行つた。かかる思想傾向を生むに至つた直接の動機は無論イスラエル民の國家生活上に起つた破局的變轉であることは疑ないところである。即ち、イスラエル王國の南北兩王國への分裂後に起つた亡國と捕囚という未曾有の事態のために、イスラエル民が體驗した名狀し難い絶望と苦難とが過去にダビデの治世の光輝と幸福という黄金時代をもつた彼等をして新なるダビデの出現を待望するに至らしめたことは容易に肯けることであらう。

これと共にわれわれはメシア思想の形成と發展の上に與えた外來思想の影響を忘れてはならぬ。その一つはペルシヤの宗教思想の影響であり、今一つはエジプトの民族的傳説のそれであるが、就中前者の影響は決定的なものであつたといつていいであらう。

イスラエル民は五十年間、捕囚となつて敵國バビロニアで生活した。故國へ歸還した後も二百年の間新なる征服者ペルシヤ帝國の主權に隸屬した。その結果アケメニード王朝治下のペルシヤとの間に政治的にも經濟的にも活潑な交

通が行われてアレクサンドロス大王がペルシャを征服して東方諸國をギリシャ文化の影響下に置いた後までも、またこの關係は絶えなかつた。ペルシャ的な考へ方や宗教思想はこの長い期間中に古代ヘブライの思想界を支配して色々な方面に多大の影響を與え幾多の新しい觀念をよび起した。<sup>(1)</sup>

まず善惡、明暗二元論の上に立つところのペルシャのメシア的終末思想がヘブライのメシア思想の形成と發展の上に決定的な影響を與えたことは否むことができない。

ペルシャの古代社會における普遍的な宗教形態はアフラマズダ (Ahuramazdā, Ahura-Mazda) の神を信仰する宗教、即ち預言者ザラツシュトラ (Zarathushtra) の開いたマズダ (Mazdā) 教であつた。

この宗教は善と惡、天國と地獄という二元論的構造の上に立つ。この宗教の教うるところによれば、宇宙の創造前に蒼穹と同一の性格をもち、双子的存在である善惡双方に對して不偏不黨の中性的地位にあるゼルヴン (Zrvan) と稱する原神があつて光明あり、芳香あるアフラマズダ (Ahura-Mazdā) と暗黒にして惡臭あるアングラマイニユの双生兒を生んで彼らに九千年の君臨を許した。アフラマズダは善の世界の創造者であり、光明の君主であり大善靈である。アングラマイニユは惡の世界の創造者であり、暗黒の君主であり大惡靈である。前者の創造したものは一切善にして、正しく、後者の創造したものはすべて悪しく邪であつて、宇宙の歴史はこれら善惡兩神の勢力の隆智消長の過程であつて、創造、混合、分解の三際に分たれる。創造とは光明の神の業であり、混合は惡神の侵冠による善惡世界の混合であり、分解とはその成分における混合の最後の分解を示している。

一萬二千年という世界的年齢の最初の三千年間は靈的創造を特徴とする。即ち善靈アフラマズダの一切の創造は純粹の靈的狀態に造られ、超感覺的形態をとつている。最初の創造物はフラヴシ (Fravashi) である。第二の三千年はされる。

第三の三千年はアングラマイニユの光明世界への侵入と人類の原始的歴史が形成される時代である。アングラマイニユは光明の世界に侵入するに當つて、この世界を守護する光明を恐れて卵の形をして侵入し、その地に死と滅亡とを普く散布し彼の軍隊は創造物の上に蒼蠅のように飛散して順次これを汚毒した。原始的人間も原始的牛靈も彼のために壊滅せんとした時に彼らはそれぞれ精液を残した。ガヨーマルトの精液からは最初の男マッシュヤク (Mashyag) と女マッシュナク (Mashnag) とが生れ、ゴージュの精液からは牛が生れ又同時に「死すべき」惡を混じたる地上のあらゆる生物が生れてきた。かくの如くして人類の歴史は始まつた。

第四の三千年は善惡混合物の分解する時期であつて具體的には預言者ザラツシュトラの生誕から最後審判の日に至るまでの時期であつて我々の現在する現代も亦この三千年中の一期である。

この世界的年齢の最後の三千年には一切の事物の終末の徴候が現われ始めるようになる。太陽の班點、あらゆる罪惡の成熟、大地、の荒廢、人人の肉體的道德的頹廢が即ちこれらである。最後の二千年には最後の預言者サオシヤント (Saoshyant) がメシアとして現われる。この時期には、人間は次第に食欲を失い遂には水だけで生きる状態となり、次いで死者の復活の事業が開始される。人間はその創造された順序に従つて再生し、最初にガヨーマルト、次いでマッシュヤクとマッシュナク、そして善人と惡人とが再生する。この再生はメシアたるサオシヤントの手で行わ

れる。最後の瞬間に突如として天空から慧星 (Gochihar) が墮落して世界を震撼させ、大地に大火を引き起し、爲に山中の一切の鑛物は溶解して白熱せる一大鑛流をなすのである。これは善人及び悪人が通過することによつて必ず受けねばならぬ神の試煉である。善人はそれを恰も濫い牛乳のように快適に感ずるが、悪人には無上の恐ろしい刑罰なのである。この白熱の鑛流は一切を清淨にし、悪人さえもその穢れから淨化される。この鑛流は最後は地獄をも淨化して、それを光明世界の一部に加える。善は悪に勝ち、一切の罪惡はこの世界から消失し、一切の善はここに完成される。善神アフラマズダは遂に絶對的優位者となり、かくて地上に「善の王國」(Vohukshashtra) が出現する。すべての人々は今や光明の神アフラマズダの一つの意志となつて存在することとなる。<sup>(2)</sup> その時人々は幸福に暮す。地は平野の如くなる。萬人にとつて在るものは唯、一つの國語、一つの法律、一つの政治のみとなる。かくて最初の人間であるガヨーマルトの創始した世界新生の事業は最後の預言者でメシヤである。サオシヤントによつて完成されたのである。これはまことに典型的な千年王國説 (Chiliasm) といふべきである。

このペルシャの終末觀の影響は頗る深大であつて、「ダニエル書」、「エノク書」、「預言者の託宣」、「モーセ昇天記」及び新約の諸書に見えるメシヤ思想はその基本構造において全くペルシャ終末觀と同一であつて、いわばその換骨奪胎と稱しても恐らく過言ではあるまい。これらへブライの諸書はルナンの言うようにペルシャの終末思想をただユダヤ的に表現したものである。この思想は世界を駆けてローマにまではいり込み、そこでも亦多數の預言詩に靈感を與え、彼らをして世界の新生と黄金時代の到来を歌わしめたのである。<sup>(3)</sup>

次にエジプト思想からの影響については多くを語る必要なく唯、一言で充分である。メシヤ思想に關してイスラエルがエジプトから學んだものはメシヤとしての「理想王」the ideal King の觀念である。ナイル河溪谷に傳わる傳

承は歡喜と繁榮の一時代が天地神の子にして理想王たるオシリス (Osiris) の治世に存在したことを物語つてゐる。この過去の理想王の觀念を過去から未來に移して、これに救世主の使命を與えればここにメシヤの觀念が生れてくる。<sup>(4)</sup> エジプトは先進國であり又イスラエル民とエジプトとの關係が出埃及時代から密接頻繁であつたことを思えばイスラエル民がエジプトから「理想王」の觀念を學んだことは容易にありうると思われる。

(1) Drews, Archur: De christushythe 1924 (原田瓊生譯キリスト神話、岩波現代叢書)

(2) 足利博氏—ヘルシャ宗教思想(弘文堂教養文庫)昭、十六年、八六一—八七、八八一—九〇、一〇四—一〇六 Guignebert: The Jewish world in the time of Jesus 1939 p. 131—132

(3) Renan: Vie de Jesus 1863 津田權譯イエメ傳(岩波文庫) 九三

(4) Guignebert: The Jewish World in the time of Jesus 1939, 132—133

## 九

このようにして形成されたイスラエルのメシヤ思想が從來の如く預言の形式をとらず、夢や幻による象徴の文學という形式をとつたのが所謂默示文學であつて、特に紀元前二〇〇年から紀元一五〇年乃至二〇〇年に至る時代に盛行したが、その最初の最も代表的なものはアンテオコス、エピファネス時代の熱心な一無名ユダヤ人によつて作られ、古代の賢者ダニエルの名を冠せられた書、即ちダニエル書がこれである。

この著者は新なるメシヤ信仰の準備とその信仰の術語とを創造し、メシヤに對する希望に決定的表現を與えて、最初の歴史哲學ともいふべきものの礎石を置いた。メシヤはもはやダビデ、ソロモンのごとき王ではなく、神政者にしてモーセの徒であるクロスのごとき者でもなく、雲に乗つて現われる神の子であつて、人間の姿をとり世界を審判し

て黄金時代を治むべき超自然的存在者であつた。

舊約聖書の中、ダニエル書はイエスに最大の影響を與えたといわれている。イエスはギリシャの文化と學問を知らなかつた。ギリシャ研究は危険なもの、卑しいものやせいぜい女性に装身具の代用となる位のものだと公言され、パレスチナの學者たちはこの文化を禁じ「豚を買う者と自分の子にギリシャの學問を教える者」と同じ呪いをかけた。いづれにせよ、ギリシャ文化はナザレのような小さな町々にはいりこんでいなかつた。だからギリシャの學問のいかなる要素もイエスにまでは届かなかつた。彼はユダヤ教より外には何も知らなかつた。彼は既にギリシャ、ローマ等によつて實證學問の方向が言明されていた時代に生れながら、全く超自然的な考え方のうちに生活していたのである。

イエスの根本思想は始めから神の國の建設であつた。「神の國」、あるいは「天國」の名は世界にもたらした革新を表現するためにイエスが好んだ言葉であるが、この言葉はメシアに關する殆どすべての言葉と同様にダニエル書から出たものである。ダニエル書では、當然亡ぶべき運命をもつた俗界の四つの國が第五の國に道を譲る。そうしてこの國は「聖者の國」(聖徒國)と呼ばれて永遠に存続するものであるといふのである。<sup>(1)</sup>

誰がこの神の國を實現するのであるか。イエスは自分を神意の實行者であり、神國を實現する「人の子」であり、「神の子」であるメシアと考へた。が神の國は生やさしいことでは獲られない。神の國は激變と裂けるような苦痛をもつて漸く樹てられるべきものである。神の國はメシアに關する默示録的幻想の文字通りの成就である。イエスのメシア的默示録的思想はその完全な形で次の如く要約することができる。

人類の現在の世界は惡に治められ、サタンはこの世の王であり、すべてはこれに従つてゐる。この秩序は終末に達する。この終末は大變革であり、分娩の苦痛に似た苦惱であり、奇異な現象をもつて豫告された陰鬱な災厄に次いでやつてくる。パリングネシア (Palingenesie) 即ち新生である。眞晝に人の子の兆が天に現われる。これは、シナイ山の幻のように轟き輝く幻であり、大いなる嵐、雲を裂き、電光は一瞬にして東より西に閃き渡る。メシアは榮光と威容とをまとい、御使を率い喇叭の響と共に雲に乗つてくる。彼の弟子たちは彼と並んで座位に坐る。そのとき死人は甦りメシアは裁きを行う。

この裁きで、人々はその所業により、二種類に分けられる。御使たちは宣言を行う。選ばれたる者は世の始めより設けられたる楽しい住居にはいり、そこで光を着て、アブラハム、族長、預言者たちの設けた宴につく。それは少數である。残りの者はゲヘナ Gehenna に行く。ゲヘナはエルサレムの西にある谷である。ここでは色々の時期に火祭が行われ、その場所がごみ捨場のようになつてゐる。だから、ゲヘナはイエスの考えでは、暗い淫らな谷、火に満ちた地下の深淵である。斥けられた者はここで惡魔やその手下である反逆の天使らと共に焼かれ、虫に啖われる。神の國は、この暗い苦しい世の眞中にあつて、閉された、内部の明るい部屋のようなところである。この新しい秩序は永遠である。樂園もゲヘナも終ることはない。樂園とゲヘナとは越えることのできなない深淵でへだてられてゐる。人の子メシアは神の右に坐して、この世界と人類との落付いた状態を支配するといふのである。

これがイエスのメシア思想の要旨であるが、それはペルシャの宗教思想の影響を最もうけた「ダニエル書」及び聖書外典たる「エノク書」「女預言者の託宣」「モーセ昇天記」などにすでに述べられてゐるもの以外を殆んど含んでいないのである。イエスは同時代の人々の間に一般に廣まつていたこれらの思想を唯祖述してこれを行動の支點としたにすぎなかつたのである。

これらすべてのことをイエス自身も弟子達も文字通りに取つていたことは當時の書きものの中に明瞭に現われてい

る。黙示録の始めと終りとにある「時は近付きたり」という潑刺とした宣言と絶えず繰り返された「耳ある者はきくべし」という呼びかけは、時代を通じて、希望と糾合との叫びであつたのである。

イエスはメシア君臨の時を尋ねられると、いつも拒んで答えなかつた。ある時など、この大いなる日のいつであるかは父のほか知らず、父は御使にも子にもこれを洩らさかつた。イエスは絶えず繰返した、その日はノアやロトの時のように不意である。いつも出かけられるように心していなければならぬ。人の子は、盗人のごとく思わぬ時にくる。人の子メシアは地平の端から端へ走る閃きのごとく現われる。イエスは彼の言を信じない人々が未來の世のもろもろの前兆を讀みえないのを責めて言つた、「夕べには汝ら空あかきゆえに、晴ならんといひ、また朝には空あかくして曇るゆえに、けうは風雨ならんといひ。汝ら空の氣色を見分くることを知りて、時の徴を見分くること能わぬか」と。イエスはすべての大改革者に通有な幻想から、目的を實際よりずつと近くに想像してゐた。そして明日にも世の終末の大異變が起ると思つてゐた。彼は人類の動きのゆるやかさを勘定に入れてゐなかつた。そして一千八百年たつても未だ實現されなかつたことを一日で實現できるように錯覺してゐたのである。

以上述べたようなイエスの終末思想はおよそ七十年間、キリスト教徒の心を捉えてゐた。彼等は全く待望と夢想とによつて生きた。世界の終末を明日にも見ようとして、ひたすらこの世を存続せしめるにしか役立たないものはすべて無用のものと見なされた。財産を望む心は缺點とみなされ、すべて人を地に繋ぐもの、すべて人を天より外らすものは避けうるべきであつた。結婚してゐた弟子は多かつたが、宗派にはいつた後はもう婚姻を結ばなかつた。獨身ということは公然尊ばれた。ある時など主は神の國のために自ら不具となる者を是認してゐるように思われる。生殖の休止は神の國の象徴であるように考えられた。又彼の弟子の中には死ぬ前にメシア出現の歡びの日に逢う者が幾人か

あるであらうといわれてゐた。特にヨハネはその一人に違いない者と見なされてゐた。ヨハネは決して死なないと信じていた人々も大勢いた。それは人々が偶々ヨハネの高齡をみて、神がイエスの言葉を実現させようとして、ヨハネを大いなる日、メシア到來の日まで生かしておかれるのだと思ひ込んでゐたからである。世人は皆、待望の樂園が到來するものと信じ切つて主と並んで座位につく自分を早くも想像してゐた。しかるに、メシアの日に逢うために神によつて生かされてゐると信じられてゐたヨハネが死んでしまうと、多くの人々のメシア信仰は揺いだ。世界はイエスの預言に反し、弟子達の信仰を裏切つて、一向に終りはしないまま、しつこく存在しつづけて行つて、このメシア思想の間違ひであることを具體的に示して行つた。ヨハネの死後乃至、イエスを見た人々の中の誰でもよい、最後の生存者が死んだ後はイエスの黙示思想は虚偽であると思はれるに至つた。

しかしながら、メシア思想が與えた夢幻と歡喜ほど曾て、人間の胸を湧き立たせたことはなかつた。この夢幻と歡喜とに人類はその地上から伸び上ろうと苦難の努力をしながら、自分を大地に結びつけている鉛の重りや、この世の生の苦惱を一時忘れ果てたのである。

メシア思想は現實に裏切られて甚しく力を失つたが、決して死滅したのではない。神の國の無限の追求、この空想的天國は、現代に至るまでのあらゆる改革者を鼓吹したところの強い未來への本能の原動力となつた。完き社會の建設を目指すこの一見甲斐のない努力は、眞のキリスト教徒を、常に現状との鬭争において強者となした異常な勇氣の源泉となつたのである。かくて「神の國」と、その完全な表象であるメシアとの觀念は、ある意味では、人類進歩の最も高く最も詩的な表現であつた。無論メシアの到來に對する考え方は時代によつて色々に變つた。中世では教父達をして世界の不平等に向つて反抗の努力を續けさせた。近代において、原始キリスト教徒の渴仰と極めて類似の渴仰

を抱いた理想的社會實現の努力は、ある意味で、同一思想の開花に他ならない。即ち「神の國」を永久の根幹とし、未來のあらゆる思想を芽生しめる大樹の枝の一つであるにすぎない。人間の行く社會改造の努力はすべて「神の國」というこの言葉の上に接ぎたされてゆくことであろう。

- (1) ダニエル書 第二章四四 第七章一三、一四、二二、二七
- (2) 黙示録 第一章三 第廿二章一〇
- (3) マタイ傳第十一章一五 第十三章九、四三 マルコ傳第四章九、二三 第十章一六 ルカ傳第八章八、第十四章三五 黙示録第二章七、一一、二七、二九 第三章六、一三、二二 第十三章九
- (4) マタイ傳第二章三六以下 マタイ傳第十三章三二以下 ルカ傳第十七章二〇以下
- (5) ルカ傳第十二章四〇 ベテロ後書第三章一〇
- (6) ルカ傳第十七章二四
- (7) マタイ傳第十六章二一四 ルカ傳第十二章五四一五六

## 十

メシア思想が宗教を阿片なりとして排撃これつとめたマルクシズム、共產主義をそれ自體の裡に存在しているのを見ることは洵に興味深いことである。

本來、宗教と社會主義とは根本において相排擠するものではなく、ただに兩立するのみならず、むしろ社會主義への偏向を動機付けるものが屢々宗教であつたという事實はサン・シモン、ラムネ、ワイトリング等の宗教的社會主義の場合に徴しても明らかである。彼等の社會主義がメシア思想に貫ぬかれていることは當然であつて少しも不思議で

はない。ところがマルクシズム(共產主義)の場合は聊か異なる。マルクシズムは實證的な經濟理論と嚴格なる唯物論的世界觀の上に立つ科學的社會主義であるといわれている。一見宗教的なるものはいり込む餘地の全くないかに見えるこの科學的社會主義の「聖域」に實は多分のメシア思想が伏在しているのみか、むしろこの部分がマルクシズムの旺盛なる活動力となつていゝ事實が認められる。そしてこのことは夙にマサリク、ベルジャエフ、ゾンバルト、小泉、ミーゼス等によつて、又近くはニーバーやドゥソン等によつても指摘されているところである<sup>(1)</sup>。

マルクスはイスラエルの子であつた。そして、その潜在意識にはすべての優れたイスラエル人に見られるメシア思想が潜んでいた。彼はその民族の宗教的根基から離れ、神に對する信仰を失い唯物論者となつた。祖先の宗教から離れた孤獨感が却つて彼の心に預言者の熱情をよびました。しかし人間の精神的本質は新に獲得した知的な學說によつて決定されるわけにはゆかない。彼はその本質の深みにおいて依然としてイスラエル人である。彼は神なくして實現される地上の「神の國」の到來を信じていた。マルクスにとつてヤーウエの選民はもはやイスラエル民でなくてプロレタリアである。プロレタリアがメシアであり、人類の解放者であり、そして救済者である。この新なるメシアは力と榮光をもつて現われ、あらゆるメシア的希望を實現するであろう。

マルクスはプロレタリアに古代イスラエル民のそれよりも更に大なる徳性を與えた。プロレタリアは他のすべての階級が既に擄取の原罪に穢れているに拘らず、これから自由である。それは純潔であり、未來の人類の最も道德的な人間を代表する。彼らのうちにこそ人間と勞働との眞正なる性格が表明される。

ヘブライ人のメシア的史觀に含まれるところの三つの根本的要素、即ちヤーウエ神の選民イスラエル人と異邦人と對立、異邦人に對する神の厳しい審判、イスラエル人がメシアの王國において復権するということ——これらの要

素はいずれもマルクスにおいて各々その對應的要素を見いだしている。選民に對應するものはプロレタリアであり、異邦人に該當するものはブルジョワジイであり、神の審判に對應するものは社會革命であり、そして選民がメシア王國で復権するという信仰は、マルクスではプロレタリアが共產社會で解放されるという命題の形態をつくつていられる。ベルジャエフがマルクスの革命論をプロタリア的メシア思想と呼び、ドゥソンが社會的默示録といつていのは誠に適切なる表現であると思われる。

しかしニーバーの指摘する如く、この相似性だけを強調してその裏面に存在する一つの根本的相違點を見逃してはならぬ。それは理想社會が到來するとき、キリスト教ではそれが歴史の終りにしか來ないと考へるのに對して、マルキシズムは資本主義の終りに來ると信じているところにある。キリスト教は歴史の贖罪と成就とは資本主義の終りにも社會主義の終りにも來たらざして人類の歴史全體の終りに來る、歴史の終るときのみ來ると信ずる。終末をば特定の社會組織の後に必ず來るなどは夢想しない。即ち終末の時期に關してキリスト教では無限の保留がなされているのに反し、マルキシズムでは特定の保留、即ち資本主義が崩壊するまでという保留しかないのである。<sup>(2)</sup>

(1) Masaryk: Die philosophischen und soziologischen Grundlagen des Marxismus 1899, 213

Berdiaeff: Le Marxisme et la Religion 1931

Sombart: Der Proletarische Sozialismus 1924

小泉信三: マルクス死後五十年

Mises: Socialism, New ed. 1951

山本 新: ニーバーのマルクス主義批判 昭、廿四年

Dawson: Religion and the Modern State. 1935 (邦譯)

(2) 山本新「ニーバーのマルクス主義批判」二二〇—二二二

## 均衡豫算の乗數效果に關する

### 理論の現實的妥當性 —— 膨脹效果か收縮效果か ——

高 木 壽 一

この問題は、日本財政學會(十月十一日、早稻田大學に於て開催)で研究報告としたものである。その前に九月中旬の經濟學部研究會で發表し、また大學院の財政學專攻班の演習、大學部の研究會でもこの問題を提示して多くの論争もした。いろいろ考へさせられる所があつた。日本財政學會では財政學者だけに報告したのであるから、要旨だけを述べたが、本誌の讀者は必ずしも財政學專攻者ばかりではないから、若干の説明を附け加えることにした。從て研究報告の原文よりも長いものになつてゐる。

#### 一 問題の進展

一九三〇年代に於ては主として公債支出(公債を財源とする財政支出)の乗數效果が論究されたが、一九四〇年代に於ては租稅支出の乗數效果の問題が多く論ぜられてゐる。一九四四年にカルドア(Kaldor)が Beveridge, Full Employment in a Free Society. Appendix C に於て、所得再分配效果(大所得者層から小所得者層への所得再分配の效果)を持つ租稅支出は、社會の總支出を増大させることを證明した。

更に、この所得再分配效果がなくとも、租稅支出が社會總支出を増大させる乗數效果があることを證明する理論 Hansen-Perloff → Wallich → Havelmo の理論に進んだ。殊にハーヴェルモの「エコノミトリカ」第四號(一九四五

均衡豫算の乗數效果に關する理論の現實的妥當性